

山辺里織の研究

— 仙台平・五泉平との比較を通して —

赤羽 光

The research of Saberiori

— In comparison with Sendaihira and Gosenhira —

Hikaru AKABA

“Saberiori (Saber-textile)” is a textile which has been woven at Saber Village (Murakami city- Niigata Prefecture). The Oda family has woven it for generations.

In the end of Kansei era (1789~1801, in the late Edo period), Oda Denemon Rikichi, the fourth village headman at Saber Village, had instructed his sons in the way to weave silk in Sendai, and had started to produce the silk textile. It was the beginning of Saberiori.

In the Bunka and Bunsei era (1804~1828), Saberiori began to take in the weaving technique of “Sendaihira”, and in the Tenpo era (1830~1843), they invented the original technique that two woofs are woven into the weave. This originality of Saberiori resulted from an amazing development in the silk fabric.

After the process of this development, Saberiori had made a greater hit than Sendaihira, although it was an object of imitation in Saberiori several decades ago. Department stores had ordered it more and more. In addition, Saberiori influenced the weaving technique of “Gosenhira”.

However, in the Showa period, it was inevitable that this particular textile had declined because it wasn't able to keep up with the high growth of the economy. On the other hand, Sendaihira and Gosenhira still have survived as “traditional industry”. Saberiori has a lot of historical problems in Japan silk textile.

キーワード：Saberiori 山辺里織, Sendaihira 仙台平袴地,
two woofs are woven into the weave 緯糸を2本織り込む,
Gosenhira 五泉平袴地, traditional industry 伝統産業

I. 研究目的

「山^ま辺^{べり}里^り織」とは、かつての越後の国、現新潟県村上市山辺里村で、小田家により代々織られてきた織物の総称である。寛政（1789～1801）末年に、山辺里村庄屋四代小田伝衛門利

吉が、息子たちに仙台などで機織の技術を学ばせ、手織の絹織物生産に着手したのが山辺里織の始まりである。文化・文政（1804～1828）年間には仙台平の製織技法の模倣を行っていた。また、山辺里織と同じく仙台平の技術を模倣したものに、新潟県五泉市で織られていた五泉平

と呼ばれる袴地も存在する。五泉平は山辺里織よりやや早く寛保2年(1742)に市場に出た織物である。

山辺里織は村上における重要な産業であっただけでなく、明治時代には国内においても、また輸出品としても重要視されていた。それにも関わらず、この山辺里織・仙台平・五泉平の三者を比較する議論は未だなされていない。そもそも山辺里織について製織技法やその歴史を記した文献はほぼないに等しい。そこで本研究では、仙台平の製織技法に影響を受けている山辺里織の歴史と、これが発展し、また衰退した理由を、仙台平・五泉平との比較を通して文化的な視点から解明していくことを目的とした。

II. 先行研究

山辺里織に関する先行研究としては、『村上市史』(平成11年2月1日 村上市)及び横山貞裕著『村上郷土史物語』(昭和47年 村上商工会議所)がわずかにあるだけである。これらの先行研究は概括的な記述に終わるものが多い。『村上市史』は山辺里織を明治期の殖産業の盛衰から記しているのみで、大正期以降の展開については記していない。『村上郷土史物語』は、山辺里織の歴史をおおまかに論じているのみである。

III. 研究方法

本研究に際しては、文献調査と、実地調査を並行した。

1. 文献調査

山辺里織に関する文献調査は『村上市史』(平成11年2月1日 村上市)及び横山貞裕著『村上郷土史物語』(昭和47年 村上商工会議所)を基礎とした。

また、山辺里織には他の地域との関連もあるため各郷土誌を使用し、考察をした。五泉平に関する文献は『五泉市史』・『五泉郷土史』仙台平に関する文献は『仙台市史』などを使用した。

参考文献は本稿末に記す。

2. 実地調査

山辺里織に関する文献資料は極めて少ないため、実地調査を行い、そこで得られた資料から歴史的動向や織組織の特徴を読みとった。

今回の研究過程で新潟県立文書館に『山辺里織元小田長四郎機工場沿革』¹⁾と題する手書きの文書が残っていることを発見することができた。

また、平成21年(2009)6月に、山辺里織の織元である小田家(本家)で調査を行った際に、十一代小田伝右衛門直筆の『山辺里絹織物業沿革』²⁾を発見することができた。

本研究では、これらの資料に加えて新潟県村上郷土資料館に所蔵されている山辺里織の裂見本付出荷台帳や日記の翻刻作業も行い、研究を進めた。資料調査は平成22年(2010)にも引き続き行っている。

実地調査は以下の通りである。

* ()内は調査日を記した。

村上市郷土資料館(平成20年2月・5月・8月／平成21年5月／平成22年8月)

大阪・高島屋本店(平成20年6月)

新潟県立文書館(平成20年8月)

仙台・藤崎デパート(平成21年3月)

郷土史研究家・大場喜代司氏(平成21年5月)

五泉市総合会館・生涯学習課 高橋氏(平成21年5月)

小田家始祖直系 小田テル子氏(平成21年6月)

(時系列順)

IV. 結果と考察

1. 山辺里織の歴史

山辺里織を織り出す機業は寛政(1789～1801)末年に発生したとされている³⁾。山辺里村は当時、養蚕を行っていたことが山辺里織誕生のきっかけである。発生は家内産業であり、規模も大きくはなかった。そのため、親類・家

族全員がこの機業に従事していた。当時、山辺里織機業を任されていたのは四代小田伝右衛門利吉の二男、小田長四郎⁴⁾である。小田長四郎は機業の発展にその生涯を注ぎ、製織技法の研究、染色法の研究を行った。初期の段階では様々な織物を製織し試行錯誤を繰り返していた様が各資料から見受けられる。

郷土史研究家、大場喜代司氏⁵⁾によると、当初の山辺里織は新製品を作る度に織ムラができ、呉服店に納めても返品されていたという。そのため、文化13年(1816)に西陣の職工を山辺里村に招き、袴地やその他の織物の伝習を受けた。「山辺里絹織物業沿革」には、「冬袴地の風合いは丹後平(本練平袴地)のようで、機織りは奥州仙台平に倣い」との記述が見られる。このような記述が残っていることから、精好仙台平の製織技法を模倣していたと考えることができる。詳細は第2項で述べることとする。西陣の職工を招き、技術伝承を受けたことにより、山辺里織製品の品質も安定した。同時に袴地を主力製品として売り出し始めた。

文政7年(1824)には、当時の村上藩主・内藤信敦が初代長四郎の機業への尽力を賞し、褒美金を与えた。この頃になると、藩内の婦女子の働く場が山辺里織機業となり、村上のマニファクチュアとしての地位を確立し始めた。

後の天保年間(1830~1843)になると、山辺里織の製織技法に独自の技法が施されるようになる。緯糸が2本入ようになったのだ(図1-1, 1-2)。以後、山辺里織はその独自性を保持しながら発展をした。この2本緯糸を入れる製織技法について、小田家始祖直系小田テル子氏は、「極めて難しい技術だ」と述べた。機を織る際、綜統そうこうの端を一つ下げ、緯糸を経糸の一番端、みみの部分にくくりつける技術なのだ。この技術をいかに作りあげたか、小田テル子氏は実際に機を織りながら今でも研究している。

なお、天保年間の技術革新の後に、機業を通し村上藩に貢献したということで初代長四郎は藩内帯刀御免の許し⁶⁾を受けた(図2)。それ

に加え、それまでは「袴地」と織り挙げた製品名を名称としていたが独自の技術を確立したことにより製品名を「村上平」や「村上縞」と命名した。

明治時代に入ると、山辺里織機業は販路を拡張し、袴地製造業としてその地位を確立するようになった。明治5年(1872)には東京へ、明治23年(1890)には京阪地方へ販路を拡張。現代にまで残る各呉服商(現百貨店)⁷⁾と取引を開始するなど、その勢いは強くなった。明治9年(1876)、三代長四郎は、それまで「村上平」や「村上縞」と呼ばれていた山辺里織に後世にも使える名前を、と考え、製品を示すものの総称として「山辺里織」とした。その背景には、廃藩置県が深く関わっている。当初、各県には江戸時代の藩ごとに県名がつけられていた。そのため旧村上藩も「村上県」となった。後に村上県は「新潟県」の中の「村上市」となり、めまぐるしくその名称が変化した。そのため、変わらない名前を、と考え機場のある「山辺里」という地名を採用した。しかし、この呼称が浸透するのは数年先のことであり、資料検討を行うと明治42年(1909)頃⁸⁾までは「村上平」などの名称で呼ばれていることがわかる。

明治時代の内国勧業博覧会に、山辺里織製品は積極的に博覧会へ出品され、数多くの褒状を得た(図3)。明治37年(1904)、白木屋呉服店がPR誌「家庭の志るべ」⁹⁾を発行した。その第一号に、山辺里織機業(小田工場)の広告が掲載されている(図4)。同書、呉服物代価表では明治38年(1905)6月より各地の袴地とともに山辺里織袴地の名がある。

また、明治38年の白木屋呉服店発行、「家庭の志るべ」(11月17号)内「流行案内」では、山辺里織の袴について「いわば仙台平」との記述があり、言ってみるならば越後産の仙台平と呼ぶに値するものだと、呉服店側の人間が記している。更に、同店発行明治39年(1906)「流行」(3巻の10)内の「流行案内」では、「流行の粋でございます」との記述が見えることから、

山辺里織が当時の流行の1つであったのではないかと考えることができる(図5)。

山辺里織が上記のような評価を得るまでには様々な技術革新があった。天保年間には独自性の出現を試み、その技術を土台として様々な製織技法へと応用したのだ。明治11年(1878)には袴地本練平¹⁰⁾の経糸を太くし、緯糸を細く、暑寒両用に適するように技術を改良した。この改良を、越後屋(現・三越)は特に高く評価し、販売に力を入れた。明治33年(1900)には極暑平¹¹⁾という夏用の袴地を作り、明治38年には別製本練平、明治41年(1908)に聖明平¹²⁾、その後、綾平¹³⁾や経絹平¹⁴⁾など様々な袴地が出現した。技術の向上とともに生産量・売上も上がり、明治30年(1897)には機の台数も100台以上、職工も360人を超え、村上の大きな産業としての地位を確立した(当時の村上市域全体の人口は推定1万人¹⁵⁾)。村上市域の3.6%の人間が山辺里機業に従事していた。

明治30年代に入ると、それまでは袴地が山辺里織の主力製品であったのだが洋服裏地の製造にも取り組んだ。袴地製品の工場は三代小田長四郎が引き継ぎ、洋服裏地製品の工場は二代小田長四郎の二男、小田助作が監督を務めた。小田助作は純絹洋服裏地製造日本一を目標に、機業に尽くしたという。洋服裏地をカタカナで「サベリ」と命名し、販売した。明治42年に開かれた日英博覧会では洋服裏地で金賞を受賞した。日本にとってこの博覧会は、イギリスとの通商の活発化を狙った重要なものであった。その博覧会において金賞を受けたということは、「サベリ」は日本の織物の中の代表格であったのではないかと考えることができる。このことも契機となり、洋装化の時代とともに助作の機業は大きく躍進した。

大正・昭和時代に入ると、好況や不況を繰り返し、その度に時代の波に翻弄され続けた。昭和時代に入ってからは、第二次世界大戦の勃発により海軍の管理工場とされ、落下傘を作り出した。戦後、昭和24年(1949)の繊維統制令解

除により再出発を果たした。昭和28年(1953)には洋服裏地には最適とされた新たな繊維素材のベンベルグに着眼し、生産に着手した(図6-1, 6-2)。しかし、このような化学繊維は他の地でも急速に業績を伸ばし、安く大量に仕上がるため、徐々に山辺里織の生産量・売り上げも低迷していった。郷土史研究家、大場喜代司氏の言葉を借りると、「良いものは作れるが、大量には作れなかった」のである。そして、小田家始祖直系小田テル子氏は、山辺里織が衰退した理由を「時代の波についていけなくなった」と述べた。

江戸時代後期より村上の産業として名を挙げた山辺里織は明治・大正・昭和時代の歴史に翻弄され、様々な世の中の状況に左右されながらもその時代に適した突破口を見つけていった。しかし、後の時代の変化とともに、小田家の経営によって約160年成り立っていた山辺里織機業の歴史は昭和53年(1978)の工場閉鎖によってその幕を閉じた。

2. 山辺里織と仙台平

仙台平とは、宮城県仙台市で延宝年間(1673-1681)より織られている袴地のことである。江戸時代、仙台藩五代藩主・伊達吉村は仙台産絹織物の品質向上を目指し、西陣の織物師であった小松弥右衛門を正徳元年(1711)に仙台へ招いた。同人を兵具方に任命し、藩御用の織物を織らせた。小松弥右衛門が伝えたのは、精好と言われる織物の技法である。精好とは、経糸が練糸で緯糸に太い生糸を使用する厚地の絹織物である。

江戸時代を通し、仙台平を織り出す職工は藩のお抱え織物師とされてきたが、明治維新の廃藩置県によってその形態が崩れた。藩の保護を失い、職工が四散してしまったのだ。しかし、既に長い歴史のあった仙台平は、明治時代には「伝統産業」と呼ばれる域にまで達していた。そのため、生産量や売り上げも低迷していたが袴地を織り出していた。後に仙台平は重要無形

山辺里織の研究

文化財となり、工場は1軒となった現代にまで機織の技術を絶やすまいと、仙台市広瀬川のほとりで伝統産業を守り続けている。

仙台平と山辺里織にはどのような関係があったのだろうか。山辺里織の製織技法は、寛政末年より文化・文政年間には仙台平と同様、精好織を行っていた。「山辺里絹織物業沿革」に「夏袴地は奥州仙台平の機織に倣い」との記述が見られることがそれを示す。また、文化文政年間の山辺里織袴地の組織図を見ると精好仙台平の製織技法を模倣していることが今回の研究によって発見された(図7-1, 7-2)。

先にも述べたが、仙台平の製織技法を模倣してきた山辺里織は天保年間より独自の技術を確立した。この独自性の出現により、後には仙台平を上回る生産量と売り上げとなり、山辺里織の需要は拡大していった。

第三者から見た山辺里織と仙台平の比較論評として、明治28年(1895)、京都・飯田呉服店(現・高島屋)において記された「審査覚書」がある。その資料は、飯田呉服店側の人間が各地の織物を仕入れや品質の面で審査・検討を行っているものであり、内容も現実味がある。「審査覚書」には越後製の袴地が仙台平と比肩できるもので、関西においては仙台平を凌いで売上も良いことが記してある。以下、原文である。

袴地 京阪ニテハ仙台平ニ代用シテ越後産ヲ用イルモノ多シ其品位モ優劣少ナク先ツ精調セルモノナリ

と、関西では仙台平の代用ながらも越後製袴地を売り出すことが多く、品位も仙台平と優劣のないことを示している。対する宮城県の記述には、

仙台平ノ本場ニシテ有名ナレドモ産額に至リテハ実ニ僅少ナリ染織ハ堅牢ナレドモ色柄ニ改善ヲ図ラサルヲ以テ関西ノ販路は越後製ニ

凌駕セラル他ノ製品ニ鑑ミ改良セハ販路ノ拡張ハ容易ナラン

と、仙台平の本場であるが産額はわずかで、越後製袴地の方が仙台平を凌いでいる。また、他の製品と比べ合わせて改良すれば、仙台平の販路を拡張することは容易であろう、と示している。

越後製の袴地は、山辺里織のことであると推測できる。その理由はまず、山辺里織は明治23年(1890)より関西方面との取引を開始し、翌24年(1891)には関西からの注文が激増している。それに加え、明治33年(1900)の山辺里織裂見本付出荷台帳「京阪注文記」の中に、上記の内容を裏付ける書状を発見することができた。飯田呉服店側の仕入れ係から、三代長四郎宛に以下の内容の書状が届いている(図8)。

仙台平(見本裂添付)

於
柄色ハ万事見本通り上の見本ノ中棒ト棒との間の焦栗色片羽有出無をさん羽二三て別紙之事尤も地及他ノ配色ハ見本之通右通□御本紙之下被成

上記書状は、添付している仙台平製の柄・色ともに見本の通りに、しかし、棒と棒との間に変化させるように、との依頼状である。この添付している裂は表記・製織技法から見ても仙台平と考えることができる。飯田呉服店側の人間が上記書状のように仙台平の裂を貼りつつも意匠面に注文をつけるという行為は、仙台平の代用として山辺里織袴地を用いていることが見てとれる。

「審査覚書」の記述も、仙台平の代用ながらも使用されていた袴地は山辺里織であることを示唆している。先にも述べたが、明治時代に入ると仙台平を織り出す職工は藩の保護を失い、大変苦しい時代であった。そのような時に躍進

してきた越後製袴地は、仙台平の売り上げ・生産量とともに凌駕していた。それに加え、先のような記述・書状があることから、織物評価の厳しい関西においても山辺里織の意匠、ニーズへの対応の早さが認められ、また呉服店もその価値を見出していたと言えるのではないだろうか。

3. 山辺里織と五泉平

五泉平とは、新潟県五泉市で、寛保2年(1742)に市場に出た袴地である。会津の小林繁八郎が仙台平の技術を五泉町の宮田平左衛門に教え、改良し、織り出したのが始まりとされている。五泉平は元治元年(1864)には「越後土産初篇産物見立取組」の中にも関脇として登場するなど、江戸時代の終わりには五泉平袴地の産地として有名になっていた。しかし、贅沢を禁じた天保の改革や慶應年間(1865~1868)から徐々に広まりつつあった洋服の普及に伴い、衰退していった。その後も好況と呼ぶにはふさわしくない状況の中、昭和42年(1967)に、五泉平は県指定の無形文化財となった。五泉平は唯一の職人であった三富三郎氏が引き継いでいたが、現在は高齢のため、織られていない。

山辺里織の発生は、五泉平より遅かったものの、明治時代に入ると五泉平の生産量を抜き、販売面も躍進し出した。加えて、山辺里織は明治34年(1901)以降昭和2年(1927)までの間に五泉平の製織技法に影響を与えていたと考えることができる。山辺里織と同じように、五泉平の緯糸も2本入るようになったことが、今回の研究で明らかとなった。昭和2年の「五泉織物同業組合総会決議録」(新潟県立文書館所蔵)にそれらの記述が残されている。

また、五泉平はこの間に綾織と平織を組み合わせた製織技法となっていた(図9-1, 9-2)。その製織技法は山辺里織と同じように、地の部分を綾織とし、柄(縞)の箇所には平織りを用いるものである。

この、まったく同じ緯糸の入れ方や意匠面で

も共通点の多い両織物を比較・検討した研究は未だされることがない。しかし、各資料を基に検証を行うと、五泉平はそれまでは仙台平の製織技法である精好織を模倣していた。だが、後には山辺里織が五泉平へ影響を与えたと考えて良い。

また、明治34年、五泉平を織り出す機業者によって書かれた資料の中に以下のような記述が見られる。

五泉平ト称スレバ、世人之ヲ劣等ナル袴地ノ如ク思考スレドモ、其実ハ決シテ然ラズ。品位ハ山辺里産と比肩スヘリ。

明治34年(1901)「新潟県染織業調査報告書(抄)」

(新潟県立文書館蔵)

五泉平の品位は劣るとの評価が世間から出されているが、そのような評価は正当なものとは言えず、実際には山辺里織と比肩できるほどの品位であることを記している。このことから、五泉平を織り出す機業者は山辺里織への憧憬があったのではないかと考察することができ、当時は仙台平をも凌いでいた山辺里織を模倣することは、自然なことではないだろうかと考えられる。

4. 当時の染織辞書、「織物便覧」と白木屋PR誌から見える三者の関係

明治35年(1902)に発行された『織物便覧』¹⁶⁾には、仙台平や山辺里織が代表的な袴地として説明文とともに裂が貼られている。前年の明治34年(1901)の袴地総生産額において、第1位は東京八王子の製品が挙げられている。第2位は新潟産の袴地であるが、その1位の実態は、生産量が新潟産の袴地の2倍あるのに対し、売上値が殆ど新潟と変わらない。(東京:数量71350売上42,8015円 新潟:数量32171売上42,2541円 図10)これは、新潟産袴地の半額で売

られていたため、数を出すことによってその織物産地としての大きさを世間へ誇示していたように見受けられる。第3位は京都の製品で、第4位は山形、そして第5位が宮城県の仙台平である。仙台平は数量11348、売上げが118,975円と、新潟産の袴地と大差をつけられる結果となった。ちなみにこの時期、五泉平は工場数が2戸へ減った時期である。それに加え、「織物便覧」内にも五泉平の添付資料は見られない。対する山辺里織は工場を拡張し、職工も100人を超えるなど、村上の大きな産業となっていた。

この、値段の差異は山辺里織袴地と仙台平、五泉平の三者においても見える。山辺里織と仙台平では同値であるが、五泉平に至っては、値段は山辺里や仙台よりやや下になる。参照した資料は白木屋呉服店発行の「家庭の志るべ」『流行』「白木タイムス」における「呉服物代価表」である(図11)。現在の通貨で換算して、山辺里織、仙台平ともに38000円(ないし41800円)から64000円(76000円)の値段¹⁷⁾に対し、五泉平は26000円(ないし34200円)から30400円(41800円)と、若干五泉平の方が安価である。この値段から、山辺里織は仙台平と並ぶものであったことが伺えると同時に、五泉平はやや山辺里織や仙台平より劣る、というイメージが世間ででき上がっていたように思える。

5. 総括

本研究では仙台平、五泉平との比較を通して山辺里織の歴史、独自性を論じてきた。

山辺里織は、もとは仙台平の製織技法を参考にしてしたが、改良をし、機業を発展させた。

第三者からの判断においても、仙台平と山辺里織は優劣が少ない、との記述が今もなお資料¹⁸⁾から見ることができる。とりわけ、織物の見方の厳しい関西においてもそのような評価が下されているのは特筆すべき点ではないだろうか。

一方で、山辺里織はその製織技法を通し、五泉平に影響を与えた、と考えて良い。長い歴史

の中で、五泉平は仙台平と山辺里織の「模倣」を行うことによって日本の袴地業界を生き抜くことができた。

山辺里織は「家内産業」から村上における一つの「産業」となった。そしてその「産業化」にあたっては山辺里織が仙台平からの独自性を獲得したことが少なからず寄与したのではないだろうか。山辺里織は「実用」に目を向け「良品」を念頭に置き、織を展開してきた。明治時代、洋装が上流階級の公的衣類となりつつあった時代に袴地製造を保ちつつも洋服裏地製造を行うという展開には目を見張るものがある。後の時代には、「伝統産業」との見方もできたであろうが、その称号にすぎることなく「新たな良品の織物」を模索し続けた山辺里織は、結果として高度経済成長の大量生産・大量消費という時代に合わなかったのである。

山辺里織は現在織り出されていなく、かつての面影を知る人も徐々に少なくなってきている。この織物業の歴史が風化する前に研究を進め、その全貌を明らかにし、価値ある技術の考察と復興への可能性を探ることを今後の研究テーマとしたい。

V. 脚注

- 1) 同文書には、山辺里織が発生した寛政年間(1789~1801)から昭和3年(1928)までの歴史が記されている。内容は主に山辺里織袴地に関するものである。
- 2) 同文書には、山辺里織が発生した時期から昭和39年(1964)までの歴史が記されている。内容は、山辺里織袴地をはじめ、洋服裏地まで網羅している。
- 3) 「山辺里織元小田長四郎機工場沿革」より
- 4) 小田長四郎は代々名前を継承しているため、ここでは区別するため初代、二代などで表現する。
- 5) 大場喜代司氏は、平成2年(2000)に山辺里織機業の文書整理などで多くの資料を解説した。
- 6) (原文) 日下組 山辺里村 長四郎

其方、先年より、袴縞その外、結紬縞の類、機方引き請け、地方捌(さば)き方など相はたらき、出精致し候につき、追々、御盆筋相立ち一段の事に候。依って地方帯刀、御免ならせられ候。

此の上は弥(いよいよ)出精いたすべき事

丙 五月十二日

- 7) 三越・大丸・白木屋・高島屋など
- 8) 白木屋 PR 誌内「呉服物代価表」・「流行案内」より
- 9) 明治37年7月より「家庭の志るべ」明治39年1月より「流行」、大正7年より「白木タイムス」と名称を変更。
- 10) 経緯ともに練糸を用いたもの。本練は100%セリシンを除去。
- 11) 縞の紋様のみの糸が練糸。緯は生糸で経糸よりも太い。
- 12) 半練平(経緯ともに練糸を用いたもの。半練は50%セリシンを除去したもの)に改良を加え、琥珀地とした袴地
- 13) 地は綾織、縞となる部分には平織りの袴地。
- 14) 縦方向が縞の袴地
- 15) 江戸末期で7000-10000人の人口。軒付帳の発見により明確となった。
- 16) 東京高等学校染織科教官が日本全国の織物を収集し、辞書あるいは教科書としたもの。世間の嗜好を考慮するために、全国の有名な織物を添付した。
- 17) 日本銀行 HP 参考 (<http://www.boj.or.jp/>)
- 18) 高島屋呉服店「審査覚書」
- 5) 「山辺里絹織物業沿革」(大正~昭和初期、小田家蔵)
- 6) 「山辺里織元小田長四郎機工場沿革」(年月日不祥、新潟県立文書館蔵)
- 7) 「仙台市史7 別編5」(仙台市史編纂委員会編、昭和28年1月31日、仙台市)
- 8) 「仙台市史 特別編3 美術工芸」(仙台市史編纂委員会編、平成8年3月31日、仙台市)
- 9) 「仙台市史 特別編4 市民生活」(仙台市史編纂委員会編、平成9年3月31日、仙台市)
- 10) 「仙台市史 特別編6 民俗」(仙台市史編纂委員会編、平成10年3月31日、仙台市)
- 11) 「仙台市史 通史編3 近世1」(仙台市史編纂委員会編、平成13年9月1日、仙台市)
- 12) 「仙台市史 資料編6 近代現代2 産業経済」(仙台市史編纂委員会編、平成13年9月1日、仙台市)
- 13) 「仙台市史 通史編5 近世3」(仙台市史編纂委員会編、平成16年3月31日、仙台市)
- 14) 「仙台市史 通史編4 近世2」(仙台市史編纂委員会編、平成15年2月1日、仙台市)
- 15) 「仙台市史 通史編6 近代1」(仙台市史編纂委員会編、平成20年3月31日、仙台市)
- 16) 「人間国宝55 工芸技術染織11」(平成18年6月24日号、朝日新聞社)
- 17) 「七十七銀行」(阿部清五郎編集・発行)
- 18) 「五泉郷土史」(清水清造編、昭和4年、青木印刷所)
- 19) 「五泉市史 資料編2 近世(I)」(五泉市史編集委員会編、平成5年3月31日、五泉市)
- 20) 「五泉市史 資料編3 近世(II)」(五泉市史編集委員会編、平成9年12月26日、五泉市)
- 21) 「五泉市史 資料編4 近・現代(I) 付録資料」(五泉市史編集委員会編、平成8年3月31日、五泉市)
- 22) 「五泉市史 資料編4 近・現代(I)」(五泉市史編集委員会編、平成8年3月31日、五泉市)
- 23) 「五泉市史 通史編」(五泉市史編集委員会編、平成14年3月20日、五泉市)

参考文献

- 1) 横山貞裕著「村上郷土史物語」(昭和47年、村上商工会議所)
- 2) 「村上市史 民俗編 上巻」(村上市編、平成元年10月1日、村上市)
- 3) 「村上市史 民俗編 下巻」(村上市編、平成2年3月1日、村上市)
- 4) 「村上市史 通史編3 近代」(村上市編、平成11年2月1日、村上市)

山辺里織の研究

- 24) 『五泉市史 民俗編』(五泉市史編集委員会編, 平成11年3月19日, 五泉市)
- 25) 『貞丈雑記』(故実叢書編集部編, 昭和27年10月1日, 明治図書出版)
- 26) 『織文図譜』(故実叢書編集部編, 昭和28年7月1日, 明治図書出版)
- 27) 『古事類苑』(昭和45年12月25日, 吉川弘文館)
- 28) 喜多川守貞著『自筆影印 守貞漫稿 上巻』(朝倉治彦編, 昭和48年12月10日, 東京堂出版)
- 29) 『原色染織大辞典』(板倉寿郎ほか4名監修, 昭和52年6月6日, 淡交社)
- 30) 『呉服太物流行柄綴 全三巻』(坂野素六編著, 昭和60年6月10日, 関西衣生活研究会)
- 31) 『日本歴史地名大系第15巻 新潟県の地名』(昭和61年7月10日, 平凡社)
- 32) 『日本歴史地名大系第4巻 宮城県の地名』(昭和62年7月10日, 平凡社)
- 33) 『広辞苑』(新村出編, 昭和63年10月11日, 第三版六刷, 岩波書店)
- 34) 『角川日本地名大辞典15 新潟県』(角川日本地名大辞典編集委員会, 平成元年10月8日, 角川書店)
- 35) 『家庭の志るべ』(明治37年7月~明治38年12月, 白木屋呉服店)
- 36) 『流行』(明治39年1月~大正7年2月, 白木屋呉服店)
- 37) 『白木タイムス』(大正7年3月~大正8年7月, 白木屋呉服店)
- 38) 『高島屋百年史』(高島屋本店編, 昭和16年3月, 高島屋本店)
- 39) 『産業革命の技術 産業革命の世界②』(荒井政治・内田星美・鳥羽欽一郎, 昭和56年5月20日, 有斐閣)
- 40) 『ヴィジュアル百科 江戸事情 第二巻 産業編』(樋口清之監修, 平成4年1月20日, 雄山閣出版株式会社)
- 41) 『戦後日本産業史』(産業学会編, 平成7年11月24日, 東洋経済新報社)
- 42) 武居奈緒子著『百貨店の誕生とデパートメントストア宣言』『産業と経済』(第14号第1巻, 平成11年6月, 奈良産業大学)
- 43) 末田智樹著『日本における百貨店の成立過程—三越と高島屋の経営動向を通じて—』『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』(第16号, 平成15年11月)
- 44) 武居奈緒子著『高島屋飯田貿易店沿革』『産業と経済』(第20巻第1号, 平成17年3月, 奈良産業大学)
- 45) 武居奈緒子著『貿易商社の発生的研究—明治・大正期の高島屋飯田を中心として—』『産業と経済』(第20巻第2号, 平成17年6月, 奈良産業大学)
- 46) 武居奈緒子著『明治・大正期の高島屋呉服店』『産業と経済』(第20巻第3号, 平成17年9月, 奈良産業大学)
- 47) 廣田孝著『明治期の百貨店主催の美術展覧会について—三越と高島屋を比較して—』『デザイン理論』(48号, 平成18年)

謝 辞

本研究を行うにあたり,様々な方のご協力をいただきました。

協力して下さった皆様を各地,五十音順で記させていただきます。

本研究論文の完成目前にてお亡くなりになりました五泉市文化財保護審議会・長谷川絃吉氏にお悔やみ申し上げます。

[新潟県村上市]

郷土史研究家 大場喜代司氏

小田家始祖直系 小田テル子氏

村上郷土資料館 桑原氏をはじめ, 学芸員の皆様

小嶋陽子氏

[新潟県五泉市]

太田工場(株)様

吉長絹織有限公司 代表取締役 木津順子氏

五泉市生涯学習課 高橋氏

五泉市文化財保護審議会 長谷川絃吉氏

松尾株式会社 代表取締役 松尾坦氏
[大学機関及び資料調査協力]
東京大学法学政治学研究科法曹養成専攻 大
庭康裕氏
宮内庁書陵部陵墓課首席研究官 徳田誠志先
生
横浜国立大学教育学研究科言語文化系教育専
攻 野田明氏
仙台市内藤崎アパート呉服売り場の皆様
新潟県立文書館
共立女子大学



図1-1 天保13年 山辺里織袴地 (小田家蔵)

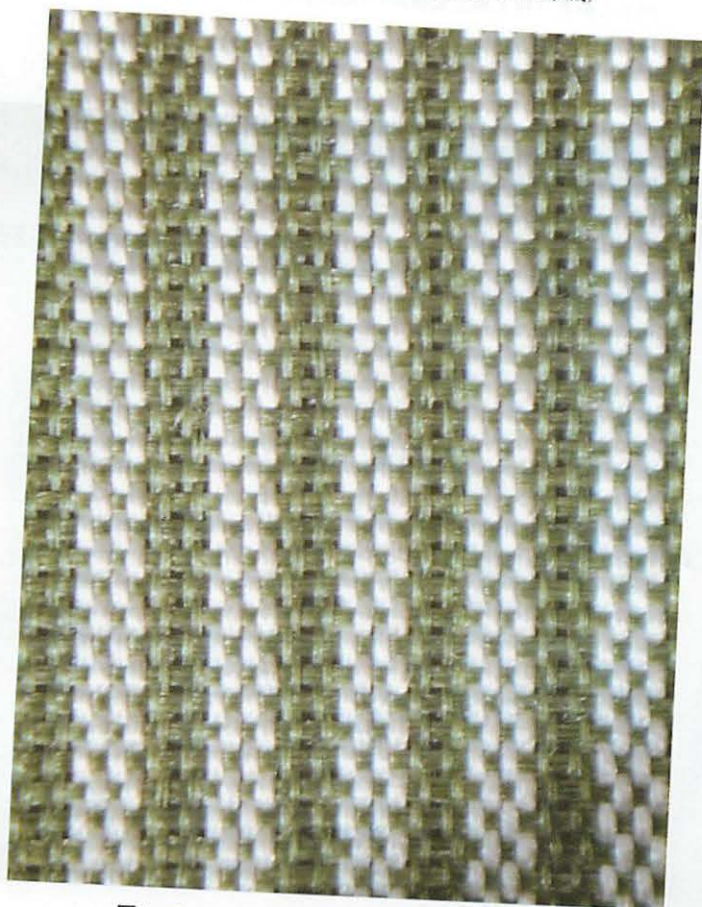


図1-2 天保13年 山辺里織袴地 (小田家蔵)

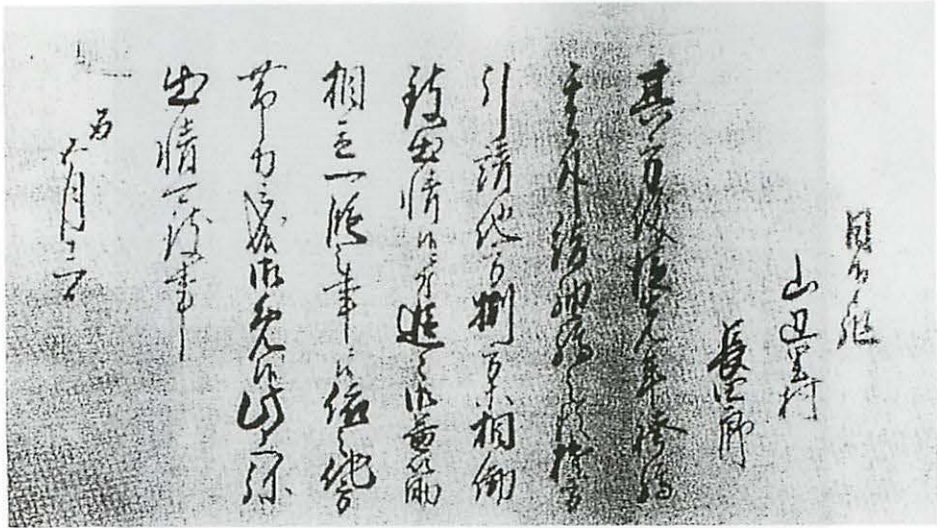


図2 藩主より帯刀を許可された文書
横山貞裕著『村上郷土史物語』(昭和47年 村上商工会議所)



図3 第二回内国勧業博覧會褒状 小田家蔵

○明治十一年東京博覽會
 ○明治十四年第二回博覽會
 ○明治十七年博覽會
 ○明治十八年東京博覽會
 ○明治二十一年博覽會
 ○明治二十二年博覽會
 ○明治二十三年博覽會
 ○明治二十五年博覽會
 ○明治二十七年博覽會
 ○明治二十八年博覽會
 ○明治二十九年博覽會
 ○明治三十一年博覽會
 ○明治三十三年博覽會
 ○明治三十五年博覽會
 ○明治三十七年博覽會
 ○明治三十九年博覽會
 ○明治四十一年博覽會
 ○明治四十三年博覽會
 ○明治四十五年博覽會
 ○明治四十七年博覽會
 ○明治四十九年博覽會
 ○明治五十一年博覽會
 ○明治五十三年博覽會
 ○明治五十五年博覽會
 ○明治五十七年博覽會
 ○明治五十九年博覽會
 ○明治六十一年博覽會
 ○明治六十三年博覽會
 ○明治六十五年博覽會
 ○明治六十七年博覽會
 ○明治六十九年博覽會
 ○明治七十一年博覽會
 ○明治七十三年博覽會
 ○明治七十五年博覽會
 ○明治七十七年博覽會
 ○明治七十九年博覽會
 ○明治八十一年博覽會
 ○明治八十三年博覽會
 ○明治八十五年博覽會
 ○明治八十七年博覽會
 ○明治八十九年博覽會
 ○明治九十一年博覽會
 ○明治九十三年博覽會
 ○明治九十五年博覽會
 ○明治九十七年博覽會
 ○明治九十九年博覽會
 ○明治一百零一年博覽會
 ○明治一百零三年博覽會
 ○明治一百零五年博覽會
 ○明治一百零七年博覽會
 ○明治一百零九年博覽會
 ○明治一百一十一年博覽會
 ○明治一百一十三年博覽會
 ○明治一百一十五年博覽會
 ○明治一百一十七年博覽會
 ○明治一百一十九年博覽會
 ○明治一百二十一年博覽會
 ○明治一百二十三年博覽會
 ○明治一百一十五年博覽會
 ○明治一百一十七年博覽會
 ○明治一百一十九年博覽會
 ○明治一百二十一年博覽會
 ○明治一百二十三年博覽會

山 邊 里 平 御 袴 地

○本練平
 は最上練糸を以て製織したるものなれば高尙
 優美にして最も久しき耐ふ

○半練平
 は地合柔軟なるが故に通常袴地の如く折され
 の憂なくしかも寒暑常用に適す

○極暑平
 は地合通洒にして暑中酷熱の際といへども更
 に苦熱を感せず

○精好平
 は價格低廉にして常用に適す

小田工場

図4 『家庭の志るべ』(明治37年7月号 白木屋発行)

縮緬鼠地繪羽文様に、
 裏は新綾絹を附けまして

同 金三十圓位

袴はかさ
 山邊里平
 白茶小田式捧綺が流行の粹で△います、
 仕立上り金十七八圓位

羽織
 五歳御男子御祝衣
 黒魚子五所紋は動きません、

図5 『流行』「流行案内」
 (明治39年3巻の10 白木屋呉服店)

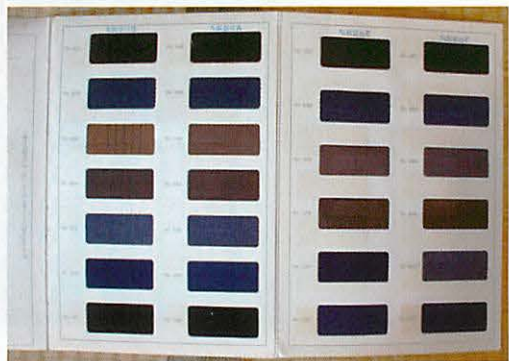
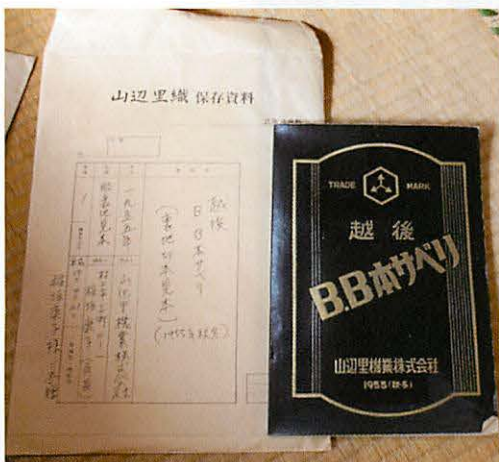


図6 昭和時代 洋服裏地・ベンベルグ(小田家蔵)

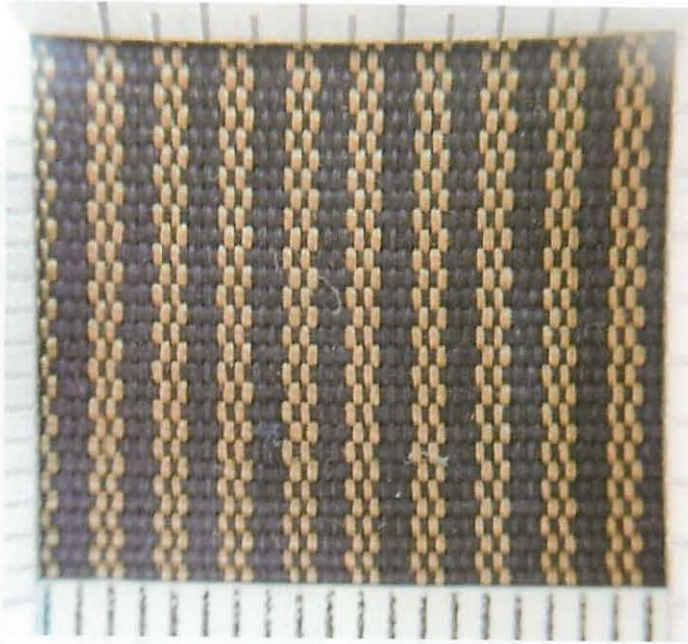


図7-1 化政年間の山辺里織袴地 (小田家蔵)



図7-2 明治時代 仙台平袴地『織物便覧』(明治35年)より

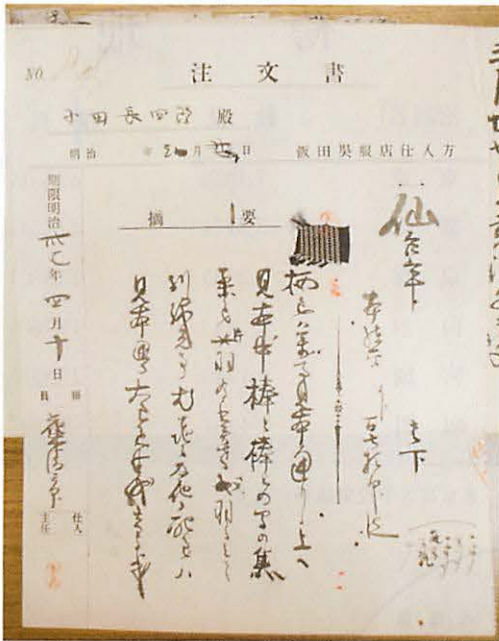


図8 明治33年（1900）山辺里織裂見本付出荷台帳
「京阪注文記」（村上郷土資料館蔵）

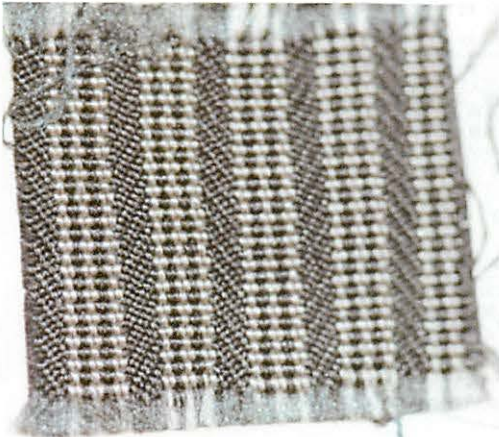


図9-1 山辺里織 綾平袴地
（「明治四拾参年東京注文記」）

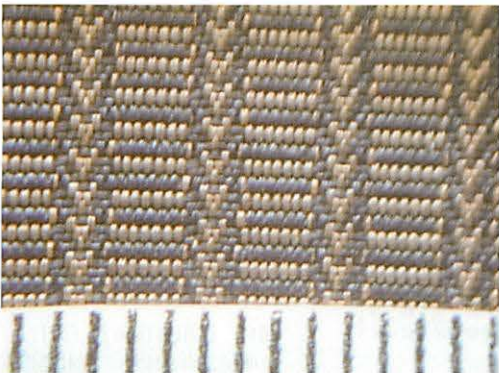


図9-2 五泉平袴地（五泉市 太田工場蔵）

袴 地

袴 地 (相綿交織)		府縣名	數量	價額
京 都	2,130 ^本	東 京	7,185 ^本	42,901 ⁵
	18,420 ^本	新 潟	3,217 ¹	42,254 ¹
		京 都	1,298 ⁵	19,880 ⁴
		山 形	1,584 ³	15,700 ⁶
京 都	男—12,284 ¹ 女—145,042 ⁴	宮 城	1,184 ⁸	11,997 ⁵
		和 岡	429 ⁷	7,100 ⁷

図10 「織物便覧」(明治35年 東京高等学校染織科)より

絹 絹	絹 和 明 緞 緞 緞 博	紗 僅 兼 八 博 仙
絹 緞	絹 緞 緞 緞 緞 緞	絹 緞 緞 緞 緞 緞
緞 紗	緞 紗 緞 紗 緞 紗	緞 紗 緞 紗 緞 紗
三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三	八六八七九七二七二八七九四 四四四四四四四四四四四四四 四四四四四四四四四四四四四 四四四四四四四四四四四四四 四四四四四四四四四四四四四	十二十二十二十二十二十二十二 十二十二十二十二十二十二十二 十二十二十二十二十二十二十二 十二十二十二十二十二十二十二 十二十二十二十二十二十二十二
遠 襟	博 紗 緞 緞 緞 緞	五 節 武 五 村 絹
紗 緞	緞 紗 緞 紗 緞 紗	平 絨 絨 絨 絨 絨
緞 緞	緞 緞 緞 緞 緞 緞	平 平 平 平 平 平
三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三	七四二五三三三三三三三三三 八四四四四四四四四四四四四 八四四四四四四四四四四四四 八四四四四四四四四四四四四 八四四四四四四四四四四四四	三二七四七五八十一十一十一 三二七四七五八十一十一十一 三二七四七五八十一十一十一 三二七四七五八十一十一十一 三二七四七五八十一十一十一
御 婦 人 御 九 帶 地 類		御 持 地 類
緞 厚 緞	明 緞 緞 緞 緞 緞	緞 厚 緞 緞 緞 緞 緞
緞 緞 緞	緞 緞 緞 緞 緞 緞	緞 緞 緞 緞 緞 緞
四二六六五五 四二六六五五 四二六六五五 四二六六五五 四二六六五五	十一十二十三十四十五十六十七十八十九二十 十一十二十三十四十五十六十七十八十九二十 十一十二十三十四十五十六十七十八十九二十 十一十二十三十四十五十六十七十八十九二十 十一十二十三十四十五十六十七十八十九二十	三十三三三三三三三三三三三三三 三十三三三三三三三三三三三三三 三十三三三三三三三三三三三三三 三十三三三三三三三三三三三三三 三十三三三三三三三三三三三三三
御 婦 人 片 側 帶 地 類		御 婦 人 單 帶 地 類
緞 緞 緞	緞 緞 緞 緞 緞 緞	緞 緞 緞 緞 緞 緞
十八八六八五 十八八六八五 十八八六八五 十八八六八五 十八八六八五	二十六六三十三三十三十三十三十三 二十六六三十三三十三十三十三十三 二十六六三十三三十三十三十三十三 二十六六三十三三十三十三十三十三 二十六六三十三三十三十三十三十三	廣 唐 黑 黒 色 丸 博 博 本 唐 緞 緞 緞 緞 緞 緞 緞 緞 緞 緞 緞 緞 子 子 子 子 緞 緞 緞 百三下十十五十七二十二二十三十八 十四五三七八八四十三十三十八 十四五三七八八四十三十三十八 十四五三七八八四十三十三十八 十四五三七八八四十三十三十八

図11 呉服物代価表「流行」(明治39年9月号 白木屋)